

# 教師のジェンダー意識に関する葛藤の様相

## —生徒に対する自己の態度の語りから—

○野坂 祐子

無藤 隆

(お茶の水女子大学大学院)

(お茶の水女子大学生生活科学部)

### 【問題と目的】

学校におけるジェンダー研究では、「かくれたカリキュラム」など教師の男女生徒への関わりが量的・質的に異なるというセクシズムの実証研究が蓄積されており、その是正の試みも多くなされてきている。しかし、多くの研究は調査者により教師の行動を一方向的に解釈・分析したもので、教師自身がジェンダーをどう捉え生徒に対応しているのかという実践レベルでの検討が必要である。

本研究ではジェンダーを相互作用のなかで構築されつづける実践“doing gender” (Wodak,1997)と捉え、教師の行動や語りに注目することでジェンダーがいかに教師自身に認識され、行動と関連しているか、その様相を捉えることを目的とする。

### 【方法】

東京都内公立中学校で1年間のフィールドワークを行い、3学年1学級の観察と担任教諭(以下、担任)への継続的なインタビュー(全18回)を実施。

担任は30代男性(教職経験10年)で国語科担当。約7年前から同僚の影響で性教育に取り組み、性役割をテーマに公開授業などを意欲的に行う。

観察と面接の記録から、担任の生徒の行動や性差についての言及箇所について検討する。

### 【結果と考察】

#### ●担任の語る生徒に対する取り組みや態度

担任は生徒と調査者に対して「男女一緒に活動」を意識的にしていると語り、実際に行っている(「基本的には男女で必ずペア」「学校なんていうのは建前組織だから、いい意味での。だから建前をこうきっちり教えていくっていうのは役割だと思う。男女に同じ機会を与えるとか)。積極的に男女生徒の機会均等を心がける一方で、「性別での仕事の割り振り」や「男女別の態度」もあると語られ、行動面にも見られた。

#### ●<男女一緒>と<男女別>指導との錯綜

<男女一緒に活動>を促進しつつも<男女別の対応>がなされる担任の行動の背景には、男女平等の指導の「建前」や理想として「男女一緒に活動をするべき」という考えとともに、「性別カテゴリーの使用の簡便さ」(「男女別に分ける方が簡単」「区別しやすい」と男女別対応の「無意味性」(「深い意味でやってるわけじゃない」)の考えが影響しているようだった。また、<男女別の対応>は担任がごく自然にとってしまう行動としても語られていた(「些細なことでもつい無意識にやってしまう」)。

#### ●ジェンダーに関する葛藤—<現場>での認識

担任が<男女別の態度>をとる理由として生徒行動が理由として語られた。「男女の自然な分離化」と「男女の行動特徴の違い」である。

担任の認識する「生徒の行動」は、担任のジェンダー意識を反映しつつ担任の体験として語られる。男女生徒の行動の違いについて、実際の体験からの認識であり(「経験則上」、他の教員の同意を予測した語り(「どの先生に言ってもねえ、同じ答えが返ってくると思いますよ」)によって強調された。

担任は「ジェンダーチェックブック」等の正当性を表明しながらも、それに共感できないという。担任がジェンダーを意識し行動するとき、「実態として」「現場にいて」「子どもと接して見ていて」という生徒との実質的な関わりが、担任自身の考えや行動を揺らがせているようだった。

ジェンダーについての教師の意識と態度は、一元的には説明できず、生徒との相互作用やその認識と関連し錯綜した様相を示していた(図1)。実践としてのジェンダーは複雑かつ多様なものであり、さまざまな局面や文脈のなかでの解釈過程に注目していくことが必要であると考えられる。

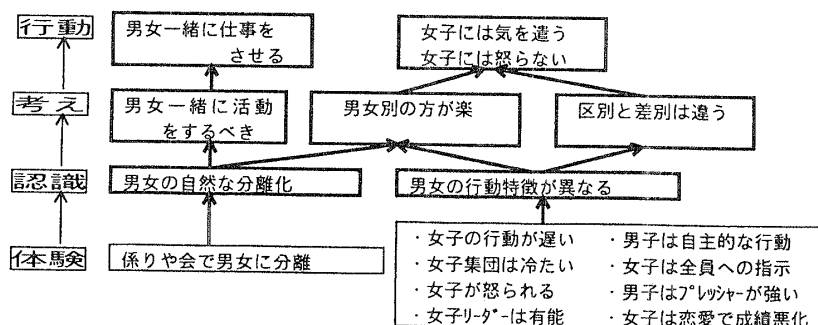


図1、男女生徒への態度についての担任教諭の語りの構造